

令和4年度入学試験 面接「概要とねらい」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 学校推薦型選抜Ⅱ 人文科学コース

(国・社・英のいずれかに関心のある小)

人文科学に関する資料で、国語科、社会科、英語科のいずれかに関心があり、小学校教員を目指す受験生が有利・不利なく論ずることができる題材のものを直前に受験生に読ませ、面接試験では資料の内容について個人面接を行う。面接官とのやりとりおよび発言の内容に基づいて、受験生のコミュニケーション能力、文章読解力、表現力、教職への関心や意欲などについて総合的に評価する。

令和4年度 学校推薦型選抜Ⅱ（人文科学コース）通読資料

菅野仁『教育幻想』

発行：筑摩書房 2010年

69～76頁、一部省略

…… これはよくわかってほしいと、私が先生と親御さんたちに強く願っているのは、結びつけたほうがいい場面もちろんありますが、でもいったん区別して理解することが大切です。自分はいったいどちらの志向性をもって、子どもに接しているのかという点検が、絶対に必要だと思えます。

「私は生徒のことを思ってやっています！」という言い方だけでははっきりいって甘いと思えます。その「思い」の方向性が、事柄に向けられているのか、人柄に向けられているのかを大人は冷静に自己診断する必要があります。多くの場合、先生でも親でも、子どもたちの人柄に向けて、あるいは未分化のまま混同して、判断しているわけですから。

昔と比べて、先生の仕事は最も増えましたし、処理すべき問題も複雑になっています。

高度な問題解決能力が要求される今こそ、…… 提示したキーワード、とくに「事柄志向」と「人柄志向」に分けて考えることが必要になつてきていると思います。

しかし、仕事柄多くの小中学校の先生に会ってお話しをする機会がありますが、よく思うのが、教育熱心な先生ほど「人柄志向」の傾向が強いということですが、

とりわけ小学校の先生にお会いして話をうかがうと、「子どもは無限の能力を持っている」とか、「人に対するやさしさが大切だ」ということを伝えたい」ということを、「私の日から見ると」「絶対化」している先生が多く見受けられます。そしてそういう台詞を前にしては、「そんなことはないでしょう」「それは子どもに対して過度の理想化をしていませんか」とはなかなか言いにくいのが、正直なところです。

でも、冷静に見ていけば、子どもというものはずいぶん早い時期からいろんな顔を使い分けているものです。もちろんすごく純真で素朴な部分もあるけれども、同時にすごく残酷だったり、「ねたみ」や「そねみ」の心、自己中心性、自分が評価されたい、他人よりよく思われたいという自己愛性、さまざまな性格をあわせ持っていることがわかります。

そんなことも考えると、「心」だけ取り出してきて、心だけを進捗点として社会的な活動や学級の活動を統御するということは、かなり難しいと私は思っています。だからこそ「人柄」ではなくて「事柄（現実）に起こっているできごと」をどういうふうにとらえるかを、考えてほしいのです。そういう視点を、もう少し学校の先生には持つてもらいたいなと常日頃つねひごろから思うのです。

いじめや何かしらの問題が起こったときに、「この子は心から反省しています。子どもに書かせた作文を見ればわかります」「子どもに事情を聞いたときに、まっすぐに私の目を見つめて誠実に答えてくれました。だから、この子はもう大丈夫です」——そんなロマン主義的な感覚だけでは、多くの場合、あまりきちんとした問題解決にはならないと思います。人間は、たとえ大人でも子どもでも、その時その時の状況に合わせた心境に簡単に共鳴するものです。その瞬間は、「心から反省したつもり」になつていても、違った状況になればペロっと舌を出しているかもしれないかもしれません。何も特別に小ずるい子どもだけがそういう振舞いをするわけではないと思つていた方が良いでしょう。

…… しめくりとして、こうしたたかな子どもたちとの関係をきちんと構築していくために私が提案したいのが、「クールルティチャーのすすめ」です。

では、クールルティチャーとは、どんな先生でしょうか。

(一) 教育に対する情熱は人一倍持ちながら、しかし冷静に生徒や児童を見ていて、どんな子どもに対しても、最低限基本のサービスをきちんと提供できる先生。

(二) しかもさらに伸びそうな子どもには、個性を尊重しながらアドバイスができる先生。

(三) クラスを家族のように考えない、つまりあまりにも共同体的志向を強くしすぎずに、子どもたちの学力や状況について、客観的情報やデータに基づいた分析もきちんとできる先生。

こんな教師像が、これからはますます必要になってくると思います。

クールルティチャーといっても、「非人間的で冷たい先生」という意味ではもちろんありません。情熱はあるのです。ただ、何かを表現するときに、自分の感情が昂^{たか}つて熱くなりすぎない先生です。長々とお説教をたれたり、人生訓を述べたりしすぎないタイプの先生です。お説教や人生訓は、ややもすると、過度に情緒的で理想主義的なものに陥りがちですから。

つまり、「事柄志向」に基づいて指導できるのが「クールルティチャー」で、どうしても熱くなって人生訓をつい語ってしまうことを好むような先生は、「人柄志向」の先生ということになります。

人柄志向も時と場合によっては確かに必要です。私が言いたいのは、人柄主義を排除せよということではなくて、これまで教育の現場では、あまりにも人柄志向的な傾向が強すぎたということです。

曇りのない眼で事柄的事实を見て、分析し、そういうものに基づいた指導ができる。だがハートには、潜在的にはすごく熱いものを持っている。しかし自分の情熱に浮かされることなく、冷静に事実に基づいた判断を心がける先生。そんな先生をまさに「クールルティチャー」と呼びたいと思います。いま一番必要なのは、こういう先生だと思

ます

ハートの熱さをそのまま表出してしまうと、自分のハートの熱さに感度良く反応してくれる子どもにはどうしても極端にフレンドリーになってしまうし、逆に感度の悪い子には「どうして俺の気持ちかわからないんだ」となって、関係が悪くなるという悪循環になってしまうことがあります。結果、一生懸命やっているつもりなのに、「あの先生は不公平だ」といわれることになるのです。

もう一度まとめておきます。クルルティチャーというのは、ハートは熱い、けれど熱いハートを持ちながらもあくまで「事柄志向」で子どもとコミュニケーションをとる。「事柄志向」と「人柄志向」の区別立てをベースとして、先生である以上は「欲望を制御する作法の身体化」を子どもたちに伝授することを第一の基本として、最低限きちんとした学校の共通基盤となるようなカリキュラムや知識の伝授やマナーやルールの感覚を伝えながら、さらに自分のプロデュース領域もそれなりに保つ——そんな先生です。そしてクラスというものをあまり共同体のような統一の実体と見ないで、事柄志向に基づいて情報やデータもそれなりにきちんと分析できる、というようなことを目指す先生です。

こうした教師像をなぜ私が提示するかというと、上下関係という非対称的な関係そのものをなくすのではなくて、非対称的な関係の現代社会における最小の公準、多くの大人と子どもが共通了解できるような、見取り図を描きたいからです。

上下関係には、必ず「力」(もつと露骨に言えば「権力」)が発生します。その「力」そのものを「悪」と見立ててしまうと、先生⇨生徒関係、あるいは親⇨子関係そのものが成立しなくなると私は考えています。だから「力」そのものをゼロにするのではなく、「力」をなるべくニュートラルでコントロール可能なものにしていくにはどうしたら良いかと考える

……。

その答えの形が「クルルティチャー」なのです。教師だって人間ですから、気に入った子には甘くなったり、ソリが合わない子には厳しくなったりということは、正直言っているのです。でも、そうした意識をコントロール

ルするかしないかによって大きな違いが生じます。熱血・人格志向の先生は、子どもたちとの関係の中に、なかば無自覚に、コントロールされていない（力）（権力）を発動しがちです。「善意」「愛情」「心配」など様々な情緒的な言葉を言い訳にして、そうした権力を発動しがちなのです。

熱い情熱をクールな事実志向の感覚でコントロールし、自分の（力）を制御している先生——そうしたタイプの先生がやはり必要な時代になってきているのではないでしょうか。